

時の流れ、時間の進みが早いなど感慨にふけりつつ、12月になってしまった。昨日のこと、一週間前のこと、一か月前のことが、右から左にこだわりもなく記憶の隙間から消え去っていく。オレの脳は、思考やら記憶やらの襞が少なくなりつつあるのか、山が崩れ、谷が埋まり、滑らかになってしまったのか、というような景色が思い浮かぶ。思考やら記憶やらが脳の襞のギザギザに引っかからない、そこにとどまって活動しない、なめらかに滑っていってしまう、という感じがして仕方がない。脳の襞のギザギザに引っかからないとは、はなはださびしい限り。考えるということを拒否してしまう、一つ二つ三つと考えながら、数が多くなりだすと、その数に惑わされ自身を失ってしまう。決断しなければいけないことが、一つ二つ三つとあれば、どれを選択すればいいのか、なにを破棄すればいいのか、それとも、どれでもいいや、と思いつくままにどれかを受け入れて答えを出してしまう、決断してしまっている。記憶ということでは、まわりの同年代の方々と同じように、「昨日 何を食った？」という話から、「会ったのは 先週だった？ 先月だった？」というようにあらゆることを忘れ去っている。それなのに、大昔の何かの記憶だけは鮮明に、長らく使用していない脳の襞の隅っこでひっそり収納されていたのが何かのきっかけで蘇り、「夕方の時間だった 場所はあの部屋で 机がありカーテンのデザインも鮮明だ」その時の、「相手との会話 相手の表情」なんて画面を見るように画像が流れ出す。何もかもボケかけているのに、一つ二つの大昔の言動だけは頭に浮かび妙にこだわっているという、ケタイな現象、これは笑いである。

来年三月に展覧会がある、いつもの新大阪：シュスタ倶楽部の展覧会である。展覧会の案内状に毎回三行ぐらの短い文章を載せている。今年は文言がすっと出てこず、難産の末、次のように書いてみた。

オレも いささかオジン なれど
イエローに ピンクに バイオレットに囲まれ
花畑なぞ 比べものにならないよ

短い文章は、「何が言いたい 何を削ればいいのか」と四苦八苦する。俳句や短歌、「オレには この感性が わからない」とこれまた四苦八苦するのだが、言葉の流れ、文章の美しさ、これは認めている。万葉集の歌など、解説書を読んで時代背景、歌人の背景を教えてもらい、やっとそういうことかとわかるのだが、これらを全く信じ切っていないのやら、それとも本人は少し違うことを秘かに言っていたのだが、その秘かさを察知する識者がいなかったということはないのだろうか、いやあるとおもうよ。

話はそれだが、この短い文章、六十歳ぐらいのころは、「六十歳になっていささか体力がなくなり 歳を感じます・・・」などということ書いたような記憶がある。その当時、さほど体力が無くなったとは思っていなかった、それは、「年相応のことを言わなければ・・・」とオレの社会性、「まだまだ 元気じゃ」では元気がない人に失礼だとも、これまた社会性を発揮していた。七十歳を越えた昨今、体力が、気力が、減ってきている、無くなっているとそれこそ実感し始めた。ただオレのまわりに、八十歳代のオジン・オバンが何人もおられる。シャカシャカ歩き、酒を飲み、大きな声で笑っている。「オレもあの歳まで あんな風に 生きておれるのか」と彼ら、オジン・オバンを目の前で見て、オレの体力の無さ、元気のなさを思い、いささかたよりない感じが否めない。

今までは、展覧会の案内状を作る時には、「この絵を 案内状に載せる」といつも決まっていた、「これだ」と何日も前から決めていた。今年は決まらなかった、あれやこれやと引っ張り出し、「ええいこれでいこう」とやっと決めた。これはどういうことかといえば、いい絵がたくさんある、選り取り見取りにどれでもいい、どれを使ってもいい、とぜいたくな話だったわけです。今年の春、3月の展覧会が終わってから、時間がたっぷりあった。描いた描いた、たくさんの絵を描いた。月並みな言葉かもしれないが、「この歳になって 七十歳を越えて オレはやっと 絵が描けるようになった オレの絵がスイスイ 描けるようになった」

◎8:40 坊村葛川市民センター駐車場から出発。同道は久子さん。ほぼ十日前の11/25に、葛川の反対側から比良：伊藤新道から反時計回り、白滝谷、牛コバに入っている。ほぼ十日前と同じように7時に茨木を出発しているが、寄り道したので出発が10分遅かったと思出す。建物の間を抜け小川の橋を渡るとすぐに散策路の看板があり、誘われるように草の中に、「えいきなりこれを登るのか」という急斜面を登っていく。

◎急斜面とはいえ、二足歩行で歩ける道、何かに掴まらないと登れないという道ではない、エッチラオッチラ、汗が出る、暑い。昨日は全国的な異常気象で、昼間はぽかぽか陽気、夜は大雨と雷、夜の散歩の途中に降られ、服がずぶ濡れになった。おそらくこのあたりも大雨が降ったのか、地面はまだ濡れている。

◎「モミの木」おおそういえばこれはモミの木だ、針葉樹、クリスマスツリーの木、二人で手をつなげそうな太さ、ドラム缶の太さだ。この樹を見て今年6月北海道の雌阿寒岳：オンネトー湖あたりに林立するアカエゾマツの樹を思い出した。途中で林道を横切るあたりに、平べったく葉が広がった植物、ビロードモーズイカという草だという、調べると上に茎が伸びる、そういえば見たことがある花だ。もみじ平・ぶな平と標識がある。

◎急斜面が30分ぐらい、そのあとはなだらかな尾根道になってきた。快晴の予報だが、うすぼんやり陽が見えることもあるが、今にも雨か雪が降りそうな暗い空が続く。向こうの山は明るく朝の光を受け、緑色に黄色に輝いている、どうか一日降らないでくれと願うばかり。昨日の陽気のおかげで、毛糸の手袋も帽子も持ってこなかった、ザックの中には、防寒シャツ・ジャンパー・雨具上下が入っているので安心だが。

◎十日前は北斜面だったのか、ほとんどの樹々が落葉していたが、こちらは南斜面、いまだに緑が濃く、針葉樹、常緑広葉樹が多い。モミ・ナラ・クリなどだそう。鳥の声がピーチクと盛んに聞こえる。

◎「あれれ 何の音」そう、ゲラが樹をつつく音、カンカンコンコン、奏でるように聴こえる。

◎クリの実？ゴキブリの羽？たくさん褐色が散らばっている、モミの松かさの羽が取れたものらしい。

◎10:30 鎌倉山 950Mに着いた。長袖シャツ一枚では寒い、ジャケットを出した。「あれれ ぼつり いやだね」

◎峰床山に向かう、ポコリン上り下りをいくつもやり過ごす、寒い、お陽さまが顔を出すと暖かいけれど、雲に隠れると冷たい風が吹く、登りばかりだと身体がポカポカしていたが、尾根道に出、ポコリン上り下りは身体にらくちんなれど、ポカポカにはなっていない。昨日の陽気、天気おじさんも、「12月にしては異常な温かさ」と解説していたが、今は小雪が舞いだしてもおかしくない雲行きである。鹿の糞にしては形が違ふと不思議なものを見つけたが、「それはキノコの腐ったやつ」という返事が返ってきた。ケタイなやつだ。

◎やっとならしい、ぶつといブナが姿を現し始めた。先ほどから細い樹々もブナだと思っていたが違うらしい。オレは一体、今まで何を見ていたのやら、どうも樹の名前も花の名前も大いにでたらめな自分を再発見。ふただかえもありそうな幹まわりのブナ、それでも若々しく天に向かって伸びている。一本の倒木、根がそのまま宙返り、「でかい」今まで見た倒木の中で一番大きな根の宙返り、小さい家一軒分ぐらいの大きさだ。

◎このあたりまでくると、まわりの樹々は、スギ以外はすべて葉が落ちている、山また山に囲まれ、どこまでも山以外は見えない。1000M前後の山々が、ずっと向こうの方まで続いている。まだ雪を冠った山はない。

◎オグロ坂峠にやってきた。標識に、「久多」と出ていたので検索してみると、ここは小浜と京都の中間地点、鯖街道の一つでもあるらしい。澤山さんが亡くなったと連絡があった日に、衣川さんと遠敷峠で車を止め、百里が岳から根来へ降り、車のところまで反時計回りに歩いた。そこにも鯖街道という標識が見られたが、遠敷峠とここオグロ峠は同じ一本の道として繋がっているということらしい。

◎峰床山 970Mに到着。ここは京都だ。前回同様おにぎりを作ってきた、途中でひとつ食べた。おにぎりはちよくちよく食べる行動食にもなる、これからこれだなと今さらながらの発見。おかずは野菜炒め、アルミホイールで包んだが、これはよくない、汁が垂れる。大きな卵焼きと豆が入ったサラダをいただいた。

◎八丁平には池がある、山の上の湿原だ、倒木、緑の草、褐色の枯れ草、澄んだ水の流れ、先日の比良の池もこの湿原も気持ちがいい。中村乗越、ここからはどんどん下り、先日の白滝谷よりは歩きやすいが谷筋の道、昨日の雨でぬれている。木の根を踏んですってんが一回。葛川中学に出て、4時には車まで帰った。

◎一昨日あたりから急に寒くなってきた。天気予報では、「気温が一段と下がって・・・」と音声やら数字やらで聞いてはいたが、「18度が12度に なれば どういうもの なのかな」暑さ寒さは身体で実感しないとなかなかわからない。何日か前に、「Tシャツで過ごせる馬鹿陽気・・・」という話から、急に寒くなり、オレの身体、なんだかのどが痛い、なんだか咳が出る、と風邪の症状が出た。「風邪は ひきはじめが肝心 ひきはじめに 薬だよ」と言われてからはそれを実行している。その実行のおかげで、ひどくはならないが、治りもしない。

◎今回、急に寒波が押し寄せ、北陸、信州、東北、北海道にはどっと雪が降っているようだ。「2,3泊で山に行きましよう」という計画だった。半月前の計画では、八ヶ岳の麓に車を置き、2時間ぐらいの登りでいくつかの小屋がある、そこでテントを張ればいいと思っていた。急に来たこの寒さ、この雪、深い山は無理だね、登山口まで車が入らないね、と悩んだ末、「蛇谷ならなんとか登れるでしょう キャンプ場で テント1泊 焚火もしましよう」と決めた。

◎相澤・前川・岡村さまさまの3人、京都東ICを出たところで衣川さんと合流、葛川沿いを北に、朽木方面に走った。11月25日、12月5日、12月10日、なんと3回もここを走っている。大阪から比叡山のあたりまでは陽が明るく輝いていた、比良の山々の上の方が白く初冠雪が輝いている。「おおお たいしたつもり方じゃないが 上の方は雪が積もっているね」葛川沿いになると冬の日本海の空気感、どんより曇ってきた。

◎「蛇谷が岳 新しいルート 教えますよ」と衣川車についていった。かつて、二度スキー場から登っているが、「新しいルート ほお～ それは楽しみ」と林道の終点に着いた。キャンプ地の跡なのか、駐車場が、管理棟が、トイレや水場らしきものがいくつか建っている。30分も登ると、地面に、樹の幹や枝に、ちらほら白いものが目立ち始める。先日までの山の景色と違って、白が一色加わることで華やかさが増す、嬉しくなる、静寂の世界から静逸の世界に、寂しさから華やかさが感じられる世界に。

◎風邪をひいている、ひどくはなっていないが、寒波のやってきた今、山を歩いて大丈夫かな、野外でテント泊は大丈夫かな、「ええい なんとかなるだろう」としばらく前なら身体が勝っていたけれど、肺炎になった友人の話もちらほら、それでも、「ええい なんとかなるだろう」と登っている。ここは往復4時間もあれば帰ってこられる山、白い雪が顔を出し始めたが、風もなく、気温も零度ぐらい、登っていると身体がポカポカしてくる。

◎「あれれ きれいじゃないか」と地面を見ながらはっとした。土がイエローオーカーの粘土、黒褐色の落ち葉の残骸が散っている、そのまわりに白い雪がうまいぐあいに増殖してきたように囲っている。白と黒と黄土色の世界がオレをはっとさせた。

◎あと30分で頂上というところまで来た。雪は10センチぐらい積もっている。毛糸の帽子をとると寒さを感じる。今年、初めての雪の感触、キュッキュッキュ、靴で踏みしめる音がする。

◎上の方は白一色の世界、地面も斜面ももちろんのこと、樹々の幹にも枝にも白い雪がついている。青空が出てきた、陽が差し始めた、飛行機雲が2本、南の方に進んでいる。

◎1時少し前に頂上に登ってきた。「なんだ 前来た道とは 少し下で同じになるだけ こんなところに出るのだ」と驚き。天気はだんだん良くなってきた、青空が半分以上に広がってきた、サングラスが欲しいぐらいに光っている。てっぺんの付近は一面真っ白、地面も頂上の標識も、幹も枝も白い。少し下は雪がない、琵琶湖がくっきり見える、向こうの山々、伊吹に霊仙に、マキノ方面の山にも雪が冠っている。それこそ白山が見えるかもしれないが、どれがそうなのか自信がない。琵琶湖の向こう岸がはっきり見え、「なんだか 狭いね 琵琶湖」「竹生島はあれかな 小さいね」と思ってしまった。安曇川の土砂堆積で生まれた三角州、車で走るとでっかい面積と思っていたが、これまた小さい。琵琶湖がこんなにクリアーに見えたのは初めてかもしれない。

◎河川敷のキャンプ場を予定していたが、「ここがいい」と山の方で寝ることにした。屋根がある東屋でテントを張った、これが正解だった、小1時間ぐらい弱い雨が降ったからだ。鍋を出しコンロを出し、焼酎やらウイスキーで乾杯。真っ暗の中に星が輝きはじめ、こんなにきれいに見えるのかと空気のきれいさ、真っ暗さに感激。相変わらず、星の名前はわからず、眠ってしまった。

河原を走りながら、「ええと 今日は何日だっけ・・・」「そう15日 そうだオレの誕生日じゃねえか」びっくりするやら馬鹿々々しいやら。自分の誕生日のこと、こんなに自覚がないのは、初めてかな。とにかく72歳になった。風邪をひいている。10日ほど前の馬鹿陽気、Tシャツ一枚で、暑い暑いという映像が流れ、このあとすぐに寒気団がやってきて、急激に温度が下がると言っていた。体調がおかしいと感じたその時に、薬を飲めばこんなに長引かなかったものを、長らく風邪などひかなかったので、「こんな風邪 すぐに 吹っ飛ぶ」との楽観視が未だ尾を引いている。若いころから風邪をひくと、一週間ぐらい治らない。咳・痰がひどく、発作のような咳がおさまらない。今回は健康診断のついでに風邪も診てもらい、たくさんの薬を飲んでいるが、この薬軍が、眠い、体力が出ないと差し障りがありすぎ早い回復を願っている。そんな寒い中、今日も河原に来ている、風は冷たいが陽が出ている、陽の当たる場所は暖かい、顔にも光が差して暖かい。青空が半分以上しめている、白い雲も青い空を目立たせるようにばかり浮いている。

先日来、不思議に思っていることがある、今さら何をいうのかと笑われるかもしれないが、向こうの方がくっきり見える、空気が澄んでいるのか、寒くなって空気の状態がより硬質なものとなり、上質のレンズがより向こうのものをくっきりこちらに引っ張ってきているのか、どうも科学的な知識がないのでわからないが、風景がクリヤーに見える。河川敷にいと、北には茨木山、亀岡に続く山々、南には生駒山。生駒山はここから10キロ20キロ離れているのだけれど、山頂の鉄塔がはっきり見える。先日の蛇谷が岳のてっぺんから見た琵琶湖、湖東の山々がくっきり見えた。琵琶湖の対岸もはっきり見え、「え 琵琶湖が こんなに 小さいのか」と驚かされた。「あの 小さいのが 竹生島・・・」あの位置でしか考えられないが、小さいものだ、よく人が住めるものだ、とも思っていた。冬は空気が澄んでよく見えるのかな、最近、オレの目は濁ってきているのか、この透明感は改めて世の中の美しさを再発見させてくれる

友人が、「絵を欲しい」という、「画像を3点送ってきて この絵が欲しい」という。この不景気の今、ものすごくありがたい話だけれど、なぜかぐずぐずしていた。「どこにしまったか 部屋の奥にしまったはず 売れた覚えはないので あるはず」だが、奥のどこから探し出すのは大変だ、と思いながら半年経った。「あの3点の絵 どうなった ちゃんと買うから 探して」とまた催促の連絡があった。山に持って行くヘッドランプを頭につけ、狭いところに潜り込み、まずは1点を見つけた。何日かしてまた探したが、見つからない。三度目の正直でもう一度潜り込み、2点を発見したときは安堵した。

絵描きにとって、物造りにとって、それぞれ違うかもしれないが、オレは、今が大事、今の仕事が好き、今そのモノが価値があると思うタイプなんだ。昔の絵を引っ張り出し、並べ眺めるうちに、「こんな仕事があったのだ こんな絵も描いていたのだ こんな解釈をしていたのだ」と改めて驚かされた。今のことにしか目線が行っていない今、過去の目線が極めて新鮮、しかも決して劣っていない、いやむしろ今よりいいかもしれないと嫉妬心まで湧く、とはちと大袈裟であるが、改めて昔の絵を見ると新鮮である。

次は額の話。今回の3点は紙に描いた水彩画、アクリル画、A2サイズが1点、A1サイズが2点。A2サイズは、マット付きの額がすぐに見つかったが、A1サイズの2点はアトリエをひっくり返して額を探しだした。彩美堂でマットを切ってもらい、軽くするために裏の枠をベニヤ板に変えた。額装だけで一日かかった。そんな作業の中で今まで額に入っていた絵の数々と再会した。「おお この絵 ああ 描いていたねえ」当時はつまらないと思っていたやつが、「いいじゃないか」と思われる、「今でも新鮮に通用するぜ」と自画自賛。

何年前にも、過去の絵をコピーしてみようといくつか描いたことがある。最初はぎこちなくなぞるだけ、物まね猿真似状態から、感性が、精霊が乗り移りいいものができだしたという絵画制作の制作過程がある。

今まで生涯、10パターンぐらいの絵をとっかえひっかえ描いてきた。「さいくりんぐやろうず」と「わたしはわたし」のシリーズが成功している。「わたし」が俄然先行しだした、いい絵が描けだした、うれしいね。

まもなく正月がやってくるという今日この頃、みなさまは、正月はお好きですか。オレは二十歳前ぐらいから、今もずっと正月が嫌いです。幼いころは、無論というかそれが当然なのか、正月が好きだった。クリスマスが過ぎ、「まもなく正月」まわりの大人たちが騒ぎ出し、その活気につられ、子供たちも気がそぞろだった。今でもそのころに口ずさんだ動揺や流行歌がおもわずでてくる。ところが二十歳前ぐらいから、正月が嫌いになった。正月だけでなく、お盆の季節も、祝日が続く季節も嫌いである。それは、「日常でなくなるから」という理由からです。日常がなくなる、日常でないとはどういうことかということ、オレはどうも、「いつものようにしていきたい いつものように生きていきたい」というのが、オレの生き方であり、在り方であり、そう望んでいるのでしょね。日常がいいとは、「より悲惨に、より哀惜に」というようにマイナスのベクトルは嫌だけれど、その反対の、「より良く より豊かに より便利に」というプラスのベクトルも、そうは望んでいない。

今年もあと十日と迫った今、「今年の展覧会は 恒例の春が 一回だけだった」と思いながら、「北海道があった」とその時の昂揚感を思い出した。年の初めに、衣川さんから、「ヨーロッパもいいけど 北海道 行きませんか」とお誘いを受けた。半月の長期の北海道、「時間が取れるかな」と思案したが、「船賃まかせて」とありがたい申し出に乗った。北海道には 20 年前にも行っている、ほとんど車中泊で一か月半ウロウロしていた。70 歳を越えたとはいえアウトドア生活大好き人間、テントより快適な車中泊、何とか過ごせるだろうとふんでいた。出発前に衣川さんが大きな地図を作ってくれ、初日、船が着けば夜なので、「鶴川町の 道の駅で 寝ましょう」「翌日は 二風谷のアイヌ博物館に 行きましょう」と計画をしてくれた。一日二日と時間をかけ東へと進んで、雌阿寒岳の麓にオンネトーという名の湖がある、そこがオレにとって、「お気に入りの場所」となった。何が気に入ったとつぶさに顧みても、これと言って大袈裟に騒ぐものはないが、あの車を止めた土の大地、アカエゾマツの硬く太い幹、山に登った時の氷、それらが思い出される。朝起きてコンロでコッヘルを沸かし、ご飯を温めながらまわりを何周も走った、いつものオジン走りだが、寒い中で多少汗ばみ爽快な空気を吸っていた。

どこかに出かける際にはあまり計画を立てないタイプ、「どうにかなるぜ」と行った所まかせのところがあるが、山は確実に調べた。旅の途中で登れる山は雌阿寒岳が一番でそこしかなかった。他の山は時間がかかりすぎるとか、危険が多いとか、いくつかの不都合があった。「よし 雌阿寒岳に登るぞ」と国土地理院の地図をパソコンに出し、コースタイムを書き込んだ。オンネトーには何泊したのか忘れたが、雌阿寒岳には 2 回も登った。2 回とも霧や雲に囲まれ、てっぺんの火口や池を見ることができなかった、もう一度登ってみたい。

北海道では、絵も描いた、何枚も描いたが、まだ完成させていない。もう少し時間をおいて、見てみるつもりでいる。「これは 一体 どういうことなのだ」と自問している。20 年前の北海道では、大きなキャンバスを広げ、朝から晩まで現地で描いていた。今回もいくつかの場所で、前回よりは小さいが、キャンバスを広げ描いている。最近のオレは、アトリエでのオレは、思い付くままに、絵具を選び、筆を選び、白い画面に向かって色を走らせている、色は我が意を得たりとばかりに画面に吸い付いていく。そういうアトリエでの感触が、外の大地の上で感じられなかった、「これはなんだ」と自問したが、吹っ切れない気持ち、思い切りの無さばかりが残った。「もうちょい 時間をくれ」というのが、あれらの絵に対しての正直な気持ち。

オレのホームページ、最初のページに自分の写真を載せている。今年も絵の前で挨拶している写真を、と考えながら、仮装はないかな、なんて不思議な話を思いついた。檻君ではないけれど、自身、檻君まがいに仮装して、自画像を撮るのは如何なものかと、ケタイなことを思いついた。先日、我が檻君を、フィールドワークで造るのは如何というプレゼンテーションをした手前、この振る舞い、オレの檻君化、如何なものかな。考えながら、ボロボロのこと、棒やら紙やらのこと、写真撮影のこと、「これは 一度 やる 価値が あるな」と、ほくそ笑んでいる。

今朝、檻樓君の夢を見た、檻樓君自体ではなく、檻樓君をいかに綺麗に見せられるか、いかに素晴らしく飾れるか、夢の中で画面が浮かび、檻樓君が存在し、そのまわりを檻樓君のパーツが組み合わされ、「ほおお いいじゃないか」と我ながら御満悦の様でそれを眺めていた。それは画面の上、筆を動かしていたのかパソコン画面を動かしていたのか定かでないが、わくわくと作業をしていた、力強い角ばった色が入り、ますます檻樓君が映えていく様を見入っていた。目が覚めて、「おおお これを進めなければ」と思いつつ、歯を磨き、布団をたたみ、服を着替え、朝食のパンを焼いているうちに映像がどんどん薄れていった。

檻樓君、我がFigure、たかだか30センチにも満たないもので、Figureと呼んでいるが、直訳すると人形のことだけれど、人形といえば日本人のほとんどが、目鼻がぱっちり、美しく着飾り、和風であれ洋風であれ、好き嫌いはあるが、「綺麗なもの 可憐なもの 女子供の好きなもの」とその相場が決まっているような気がする。ではFigureは違うのかと、へそを曲げてみたところでそう変わるものではないかも知れないが、我がFigureの檻樓君ということで通している。なに、その実、材木の切れ端・ハリガネ・紙・布、をくくりつけ、貼り合わせ、色を塗った、およそ可愛いには縁がないポロ立体なのである。

この2,3年あまり熱心に造らなかつたが、何日前に「ちょっと 展開してみよう」と思い立ち文章に書いたりしてみた。今まで檻樓君の撮影はいろいろな場所で試みた、中西プロにもお世話になって、何枚も撮ってもらった。今朝は檻樓君を、オレの絵の前で写真撮影を試みた。檻樓君も部分、絵も部分、作品としてそれぞれを表現するのではなく、それぞれが風景として、余った空間を空気として撮ってみた。「これはいいじゃないの 今朝の夢にまでは届かないが なんだか近づいてきている」という感触を得た。これは欲の問題、我欲の問題、絵を表現したい、Figureを表現したい、作品を造りたい、という欲ボケが結局はつまらないものばかりを追いかける羽目になってしまっているという悪循環の表れのようなのである。ゆっくり慌てず、次を造ってみたい。今日のもものはあれでいいとして、ついでにオレの顔を組み合わせ、来年のホームページの表紙を飾る写真も造った。

筋肉痛であるという、「えええ どこが」と問いかけてみるがおかしな話だ。筋肉痛は普段使わない筋肉を使った結果、翌日にちょい筋肉痛だという心地いい痛みを感じる。思い出すのは昔、信州からの帰り、SAエリアで車を降りトイレに向かう途中、仲間みんなが妙な歩き方で、「いてて」と歩いていた。オレは最近あまり筋肉痛が出なくなってきた。「10時間 11時間 行動で バテバテ」と登った帰りも疲れてはいるが、昔のような筋肉痛は感じない。話は飛んだが、檻樓君の骨格、これは地球の引力に逆らわないようにだけは考えているが、彫刻の基本的な骨格があり筋肉がありということは無視している。美しい筋肉があり、その上に風を感じる衣服をうまく造れば、それなりにいいものができるのだが、生来の無精者、いいものよりも、よりきたないもの、よりポロポロを目差している。よりもっと、ポロにならなければいけないのだが、それはオレの力不足が原因しているのだろうけれど、まだまだ中途半端な物でしかないと自覚している。できた檻樓君に色を塗る、これは絵を描く要領で絵具を塗っている、化粧をしている。この化粧、今、反省するならあまりにこまごま説明のための小さい筆さばき、目鼻にこだわり、光りものにこだわり、オレらしくない彩色かもしれない。ドボリと絵具に浸けてしまうぐらいのおおらかさであってもいいかもしれない。

彫刻や人形の目の話。人物や動物の立体造形で、「目がらんらん」「目が悲哀を物語る」「優しい目だ」とみなさんがおっしゃる。肖像画ということで、人物や動物の絵や写真の平面画像でも同じようなことが言える。オレは、絵描きとして、最近の作品で、目など意識したことがなかった。具象の作品、人物や動物の作品には、目のことが重要な要素かも知れないと今さらながらに意識した。古代の仏像、中東の古代彫刻、EU写実絵画や彫刻、またまた近代の世界中の絵画や彫刻、そういえばみなさん一生懸命目を描いておられるね。漫画やアニメも目はないよりもものを言っている。と、それでもオレは、これは絵空事と、うそぶく、ぞ。

加藤秀俊著<メディアの発生-聖と俗をむすぶもの>「あ この本 前にも借りて 読んだことがある」と思
 いだした。まず“まえがきにかえて”を読み、「オレも同じ オレの 言いたいことを うまく 表現してくれて
 いる」と拍手。まず、先生は「聖と俗」「カミ・ホトケ」という言葉を書いている、この土俗的でわかりやすい言
 葉に魅かれた。今までなんとなく歴史の本にふれ、「上に立つモノの話 天皇や 貴族や 殿さんのこと」これら
 は教科書に書いてある、みなさんがどんどん話している、TVで学者が、物知りの方が口やかましく説明してい
 る。そんなことより、「教科書に載っていない 下層庶民の話 ただの人が生きていく話」こういうことが知りた
 いと思った。最初は民族学も民俗学も区別がつかなかった、今でもわかったような、わからないような、「この関
 係は ひょっとしたら 区別をしなくてもいい世界 じゃないかな」と思い始めている。昔の人の昔の考え方や
 生き方や暮らしぶりは、近代、現代になってどんどん消えてしまって、日本中どこに行っても、そんなに変わら
 ない。風景も街並みも、考え方や生き方や暮らしぶりも、どこに行っても同じようになってきた。そういう意味
 で、昔の人の考え方は今と違った、昔はこういうことがあった、他国に行くと、人も物もこんなに違う、とい
 うような学問が、「懐古だ 単なる博物館だ」ということにもなるが、これで面白い、ということにしておこう。

◎「カミ・ホトケ」と「ヒト」との間のコミュニケーション。カミ・ホトケという言葉聞いてまず嬉しくな
 ったね、感激したね。俺自身の下世話な話だが、「ちょっと これは やばい」甲斐駒ヶ岳の雪の中で、無事下山で
 けるよう、カミ・ホトケを探し、ひざまづきぬかづいた、このオレがですよ。「おお やつと 頂上に着いた こ
 こからは帰れる」と雪まみれの姿で、雪をかぶった祠の前にいた。そういえば先日も、「暗くなる前に 林道に出
 たい こんな道がわからんところで 暗くなれば たいへんだ」この時も、カミ・ホトケを探した。若い人たち
 がこういうことを言うか言わないかは知らないが、カミ・ホトケとは、人間界の「俗」に対して、「聖」の世界。

◎先生(若い学者と思ったら、著作集全12巻なんてすごいジジイ、16歳上):75歳を過ぎ全ての役職から退き、
 完全な自由人となった今、国学としてのメディア論をまとめることにした。まず日本の古典をゆっくり目を通す。
 社会学でも民俗学でも歴史学でもない、我々普通の日本人の社会生活を様々な視点から考察する、原点に立ち戻
 るのである。日本人の精神世界の中を探り、我々の祖先が、「カミ・ホトケ」への畏怖と尊敬と信頼をどのよう
 なくふうで表現しようとしてきたのかを再訪したかった。

◎欧・米・中東のすべての人たちが、敬虔というか熱心な一神教の信者で信仰者だと思っていたが、本やら映像
 やらでの情報を見る限り、そうでもない人、「宗教なんて」という人もいるようだとなってきた。まず驚いたの
 が、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三大一神教の元祖が、同じ人、アブラハムだということを最近知って、
 「そらあ 仲が悪いわけだ」と再認識した。日本人の中には、熱心な信仰者の方もおられるが、ほとんどの人が
 無宗教で無信仰だ。そんな人たちのほとんどが、山や大木にぬかづき、祠や寺で手を合わせ、「カミ・ホトケ」と
 口にする。いつもそういう態度はとらないオレだけれど、勝手なもので困った時のカミダノミをすることがま
 まある。無信仰の人々でも、死後の世界、靈魂の世界、肉体が弱ってきたと感じる時点、絶体絶命というよう
 なダイナミックな世界に身を置いたとき、捕らわれ暴力に痛めつけられた時、たった一人で人のいない世界に放り出
 された時、そんなこんな条件で人は何かにすがりたいと思うのは自然な感情であり行動である。

◎科学が発達した近代現代で、「心霊」「超常現象」などと科学を基盤としながら、人知の及ばない現象について
 思索する。不可知療域として、透視術や超感覚的知覚(ESP)、テレパシー、催眠術、いまだに騒がれている。

◎先生、ミクロネシアで会った魔術師(magician)、島民たちの畏怖と尊敬を一身に集めていた60歳を越える老
 人。小さい小屋でじっと座っているその男、歯が欠け白髪を垂らしていた。この人は何でもできた、病人や怪我
 人がでれば、呪文や薬草で治した。天気予報もよく的中した。農作物が不作であれば豊穡のために祈りもしてく
 れた。村人がそっと教えてくれたところによると、「この魔術師は 誰かを殺したい」と思えば 心霊術によ
 って 人の生命を絶つ能力を 持っているという」この話は先日来読んだ本の中に、東北や沖縄のイタコやノロを
 思わせる。どこの世界でもいつの時代でも、すごいシャーマンがいる話は聞く。